

Another Love Stories

Part 1

—ヤンとゲイルの物語・総集編(上)より—

Milch Straße

新帝国暦三年七月二十六日の嵐の夜更け。

皇帝の病状あらたまる、との報せにアンネローゼは仮眠の床から身を起し、弟の病室へと急いでいた。

ここ幾日かの看病の疲れと、これから来るべきものへの覚悟とで、いつも春の陽射しのような、といわれる微笑がたたえられていた頬も、蒼白で強ばり、厳しいものが刻まれていた。

足早に正面の玄関ホールを見下ろす回廊を歩き過ぎようとして、ふと彼女は下を見下ろした。

下のホールでは、たつたいま、誰かが到着したところらしく、帝国軍服に取り巻かれた一団の人々がいた。だが、その人々自身は、彼女の見慣れた帝国軍服ではなかった。

背広姿がひとり、黒に銀の帝国軍服の中ではあざやかなくらいに目立つ白一色の旧同盟軍礼装が何人か。

そのうちのひとりが彼女の視線に感応したのか、ふと黒い瞳をあげた。

その視線はゆっくりと階上の回廊をつたっていき、下を見下ろしていた彼女の姿を見いだすと、ひとつまばたきをした。

そしてやわらかな微笑をその黒い瞳に浮かべて、軽く会釈をしたのだった。

アンネローゼも微笑って会釈を返した。それから自分が微笑って

いることに気がついた。

かつて、ジークフリード・キルヒアイスを喪い、いままた弟を喪おうとしている自分。最愛の二人を喪って、もう笑顔なんかできずにもない、と思っていたのに。

あのやわらかな笑顔を見ると、また微笑うことができた。

まわりの人全てに、笑顔を思い出させる微笑。

ほんとうの、春の陽射しのような微笑というのはあんな微笑のことだ、と彼女は思った。

そのうちに下の人々は動きだし、黒髪に黒い瞳のその人も、とりまかれるように姿を消した。

それを見送ってから、アンネローゼも歩き出した。

あの人のおかげで、なんとか微笑ってあの子を見送ることができるとしよう。あの子に泣き顔を見せて、もうこれ以上わたしのために苦しませたくはないもの。

そう思いながら弟の病室へと向かう彼女の頬には、かつての陽射しのような微笑がもどってきていた。春ではなく、冬の陽射しではあつたけれども、いつかまた春がめぐりくるのはわかつていた。

「あの、えーと、シュトライト中将？」

この呼びかけに、先に立って歩いていたアルツール・フォン・シュトライト中将は、いつもながら遠慮深い人だな、と思いつながら大切な客人の方を振り返った。もつとも、はたで見えていたシエーンコップが、名前の記憶に自信がなかったからだろう、と考えたことまでは知らない。

「なんでしようか、ヤン元帥」

「さつき、ホールで上にいらつしやつた金髪のご婦人はどなたでしようか？」

「ああ、あの方がグリューネワルト大公妃殿下であられます」

「といわれると、皇帝陛下の姉君の……」

「ええ、そのとおりです」

そう答えながら、シュトライトは先日のおーベルシュタインのときでもない（と彼には思える）提案を思い出した。

あの大公妃殿下と、この黒髪の魔術師を結婚させる、という……

「そうでしたか」

それきり、黒髪の青年は黙り込んでしまった。

隣を歩いていたユリアンなどからみれば、

（ははあ、またヤン提督は歴史の不思議さについて考えているな。だってあの姉君が存在しなければ、皇帝^{カイザー}ラインハルトも存在しなかつたわけだから）とわかつてしまうのだが、シュトライトはそこまで、この青年のことは知らない。

知らないことと、知っていることとの両方が、彼を居心地悪くさせ、だからめざす部屋に辿り着いたときは心底ほっとした。

「こちらでお待ち下さい」

「どうもありがとうございます」

沈黙考、におちいつってしまったヤンのかわりにフォローに立つたのは、帝国側がなんと思おうと使節団代表には違いない、ホワン・ルイであった。

「それでは、小官はこれで」

その声で現実を引き戻されたように、ヤンは立ち去りかけたシュトライトに声をかけた。

「ああ、そうでした、シュトライト中将」

「はい？」

「皇帝陛下がお気づきになられたら、お伝え願いたい。先日のご提案を受け入れます、と」

さりげない口調で投げられたこの爆弾に、ふたりの人物が異口同音に叫んだ。

「閣下！」

だが、その響きはまるで異なっていた。シュトライトのそれは純粋な驚愕だったが、シエーンコップのそれには驚愕とそれ以上の危惧、怒りその他もろもろの感情がこめられていた。

だが、何かいってやろうと上官の顔をにらみつけた彼は、それきり、口をつぐんでしまった。

別段、常日頃と変わったところもない穏やかな小春日和を思わせる表情だったが、この人がこんな表情でいいだしたことは、何をもってしても絶対に変えられないのだ、と彼は知っていたのだ。

二年前のバーミリオンのときも、そうだった。

シエーンコップがそれでも自分の感情をなだめきれずにそっぽをむいてしまったのを確認してから、ヤンはシュトライトのほうにむきなおり、あらためて続けた。

「フェザーンに、残りましょう」